

源氏物語事典

池田亀鑑編

源氏の読解に必要な基礎知識を整理・集成した大著！本書は源氏本文中の重要項目を注釈・解説し、その他に注釈書解題・諸本解題・所引詩歌伝・作中人物解説・人物呼称一覧・年表・図録などを収録した基本図書。待望の復刊！B5判 一一八八頁 定価二六二五〇円

(価格は税込)

源氏物語注釈書・享受史事典

伊井春樹編 平安末期から幕末までの注釈書五二五点の詳細な解題と享受の歴史を年月日順に克明に追う。編者四十年に及ぶ資料収集の集大成定価一八九〇〇円

源氏物語作中人物事典

西沢正史編 源氏物語のあらずじと登場する主要人物・脇役六十人について作品中の役割や描かれ方などを詳細に解説しその全体像がわかる定価四五二五円

源氏物語を知る事典

西沢正史編 物語全体の捉え方・女性たちの物語・巻々のあらずじ・紫式部の人生と作品・源氏物語の歴史的背景など八章に分け平易に解説した。定価二六二五円

CD-ROM版 くずし字解読用例辞典

山田奨治・柴山 守編 ロングセラーのくずし字解読辞典と用例辞典の検索方法を同時に使える画期的な辞書ソフト完成◆詳細内容見本進呈◆価格二九四〇〇円

東京堂出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-17
電話 03-3233-3741 FAX 03-3233-3746
<http://www.tokyodoshuppan.com>

軍記物語原論

松尾葦江 A5判 800頁
軍記とは何か、何が鎮魂を果たすのか。何が記憶を物語に変えるのか。

萬葉集全歌講義

第四巻(巻7・8) 全十巻
阿蘇瑞枝 謝世 14700円
国語学・考古学をはじめ、諸分野の最前線の研究成果をふまえて全歌を注釈した総合的古代研究。

「垣間見」る源氏物語

紫式部の手法を解析する
吉海直人 目次巻 865頁
一垣間見は、根拠要素だけの技法ではなく、嗅覚と聴覚も併せもつ事を証し紫式部の隠された手法に迫る。

「古事談」を読み解く

浅見和彦編 A5判 12600円
文学・歴史分野で活躍の20人が書き下ろした、古事談初の本格論集。益田勝美「古事談鑑賞」も収録。

懐風藻

日本の自然観はどのように成立したか
辰巳正明編 A5判 7350円
極めて東アジア的な日本人の季節感。そのルーツを懐風藻にみる。

伊勢物語古注釈大成

第三巻 A5判 10200円
片桐洋一・山本登朗責任編集
「伊勢物語」の主要な古注釈を体系的に編集・翻刻した決定版。

消された漱石

明治の日本語の探し方
今野真一 謝世 8000円
漱石の日本語を徹底解剖 明治期日本語のあり方をうかがう一冊。

田村泰次郎の戦争文学

中国山西省での従軍体験から尾西康充 A5判 2600円
「田村泰次郎文庫」九千点の膨大な小説舞台のファイルワークと膨大な写真に裏打ちされた渾身の労作。

近代日中語彙交流史

改訂新版
新漢語の生成と受容
沈国威 A5判 5000円
相互的な性質を持つ、日本と中国の異言語語彙交流の史実を探る。

古今集古注釈書集成

古言語彙交流の史実を探る。

鈷訓和詞集聞書

鈷訓和詞集聞書研究会編 A5判 10200円
宗祇流古今伝受の書を忠実に翻刻。底本は鷹司本。詳細な解題を付す。

笠間書院

〒101-0064 東京都千代田区猿樂町2-2-3 電話03-3295-1331
<http://www.kasamashoin.jp/> ファクス03-3294-0996 (価格は税込)

国文学 10

特集 おのまとはへ

平成二十年十月十日発行 毎月一回十日発行 第五十三巻第十四号十月号
昭和三十一年九月二十五日 第三編 戦時体制下の国文学 (題名は七十四号)

定価一六〇〇円 本体一五二四円

第五十三巻第十四号 二〇〇八年十月号

国文学 10

日本語・日本文学・日本文化

解釈と教材の研究

特集 おのまとはへ

インタビュー

谷川俊太郎 音の力オノマトペの力

聞き手・和合寛一

◆ 黒川伊保子 / 田守育啓 / 那須昭夫
◆ 岩永嘉弘 / 石黒圭 ほか

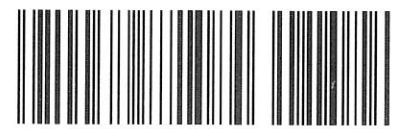
最終回

「明治維新」に異議をとなえたラストサムライ

西郷隆盛 上田篤

学燈社

ISSN 0452-3016
雑誌 03787-10



4910037871084
01524

Printed in Japan

心意伝承

—遊働世界に生きる—

ほんじょうまさかず
本莊雅一

第十三回 山水遊泳を映す生活④ 天壤無窮のエロス

流れ山サーフィン

火山の噴火や、地震などによって山が崩壊し、土石流の波が地すべりして果てたところに、新しく山ができあがることがある。流れ山という。

岩手・宮城地震の東栗駒山崩壊では、流れ山ができたという報道はまだ見ていないが、少なくとも山は流れうるものであるというイメージを、私たちの脳裏に鮮明に焼き付けた。

千葉県流れ山市の「**流山**」は、高さ十五メートル、周囲約三五〇メートルの丘が、洪水で上野国（群馬県）赤城山から流れてきて、ここに落ち着いたという伝承をもつ（『日本地名ルーツ辞典』一九九二年 創拓社）。実際は江戸川の洪水により流入した土砂が堆積した台地と言われるが、その地形に、人々は江戸川水源地域の火山が流

れてきた印象をもったわけである。尋常の土とは異なった地相を、感じ取ったのである。

ここまでくどいほどに、山や大地の遊働性といったことを述べてきたが、私たちの意識世界に展開するイメージの動きは、夢や空想や妄想も含めて、決して現実の世界と無縁におこるものではなかった。宇宙、天体の活動とひとつであり、人間が、自然とは区別していると感じる様々な文明生活も、決してそうした全体性から無縁ではありえないのである。少なくとも、遊働する世界にいかにも乗り、生きてゆくかの智慧を、心意心象に伝承しつつ、現実現象に対応してきたのだ。

天地自然は遊働するのが当たり前であった。人間の生活領域をおびやかさないように強固に固定しよう、とはせず、荒海を渡る船と同様、陸地に生活する人々もまた、荒ぶる大地のはたらきを御神徳として読み取り、住

まい方の舵取りをしてきたのである。

いわば、流れ山でのサーフィン。

もちろん海でのサーフィンのような短い周期の波ではなく、数年、数十年、あるいはもっと長い周期の波に乗る。「天災は忘れたころに……」と言うが、本当には忘れきらずに柔軟に対応してきたと言える。

自然の威力に逆らわず、しかも避けずにまともに受けて、上手に体を預けて乗り切つてゆくような、やわらかく親密な交流を人々は行なってきた。たとえば京都の上津屋橋は、橋桁を橋脚に乗せただけで、川が増水すれば簡単に橋桁そのものが流されてしまう。ロープでつながっているで橋桁を失なうことはない。これで、流木や岩石が橋にせきとめられはしないから、堤防が決壊するほどの増水は避けられる。このいわゆる「流れ橋」などが、自然の威力をやわらかに受けとめる典型的な表現であらう。

カミへの求愛生活を考へる

ところが、ほとんどの現代人の日常は、常に様々な情報や消費すべき商品の氾濫に対応することで占められている。こうした生活では、自然世界との全体的な生命交

流は皆無に近いほど稀薄になりつつある。たとえば仔牛のステークをおいしく食べる時に、私たちはちいさな牛の子が母親から引き離され押さえつけられ鳴きわめく喉を切られ血を抜かれ解体され切りそろえられ冷凍され出荷される光景を、正視していない。想像すらしない。今咀嚼している肉は味の良い商品であって、「仔牛」というのは「情報」にすぎない。仔牛本人との、全身的な交流はない。

現代の「情報」とは、実体の連想をほとんど不可能にするほど断片化されたものだ。断片的な「情報」を選択させられることに慣れてしまった心意をもつ私たちもまた、個体としての全体性を喪いつつあるのかもしれない。かつての人々は、食べようとするものと全身で相互交渉した。反撃にあつて負ければ自分が食われるし、勝利しても断末魔の生命の慄えをわが手に感じて、それを食したであらう。残酷なようでも、生命の尊厳に敏感な心意がそこでは働き続ける。

そのような場合、自分の心意とは、天地万物の心意でもある。また自分の身体とは、天地の身体でもある。彼らの区別を越えた、同調共鳴を生活の基礎としているのだ。

天空も山野河海もその中にあるさまざまな有機物も無

かつて上原輝男に示されて、目のくらむ思いがしたものであった。

安貞二（一二二八）年、鎌倉時代初期のものだが、この洲浜形の浮島に松喰い鳥たちが群れ集う図が、「女体権現」とされている。なぜ女体なのだろう。特に生殖器



住江時手箱 蓋裏
「原色日本の意匠 第13巻」(京都書院)より

を観して、慨然みて感^みを興^{おこ}して一歌を詠^よんだという記事^{みそなは}を、じつを言^いうと私は山^{やま}への畏敬^{オホコト}求^{もと}愛^あとして読^よんだのであ^あった。

日本には「男体山」「女体山」という山のとらえ方があり、あるいは夫婦関係を連想させるような一對の山を妹背山と呼んだりして、古人は地形に性的な肉体を見つけてることをふつうに行なってきたからである。

雄略紀の話は書紀編纂者が構成した説話にすぎまいが、もとは、人が山の姿態に欲情して歌を詠むということも、広く行なわれていたのだろう。

新田次郎の小説『孤高の人』（新潮社）にも、主人公の加藤文太郎が、冬の八ヶ岳に単独で挑み、硫黄岳の雪肌^{ユキノハダ}が、朝焼け^{アサノヒ}によって羞^はらう乙女のごとくバラ色に上^あ気するさまを見て、恋心と同じ胸のときめきを感じるシーンがあった。つまりこの感性も心意伝承であって、一家の独創ではないとわかる。

ここにひとつの図柄を紹介したい。

機物も、すべて生きとし生けるものとして、古来人々はカミを見出していた。そうしたカミへの畏敬^{オホコト}求^{もと}愛^あのありさまを自覚するのが、私たちの現在の、あるいは未来の生活へと続く心意伝承の自覚となるはずである。自覚がなければコントロールもありえないだろう。自由に生きているつもりでも結局は無意識のイメージ運動に支配され、あたかも「氾濫する情報に振り回され」ているかのよう^{よう}なありさまにしか、ならないのだ。

前提として、心意伝承の内容は、必ずしも人間社会に有意義なものばかりとは限らないことにも留意しておきたい。いわゆる狩猟本能といわれるようなものが、無抵抗の人々や乳幼児にまで向けられる昨今の状況をみれば、何をか言わんや、である。よくよくわが心の暴走にも注意を払わねばならないにもかかわらず、心理学が専門の科学として発達し、一般庶民が自分の心をプロに分析してもらわなければ何もわからない、無免許で自分の心を理解してはならないとでもいった風潮が、広がっている。一般人の側が、そうしてしまっているように見える。それではかえって、無自覚の心の作用に無防備に支配されることにもなりかねないのである。

私たちは自分たちの心を自分たちの手に取り戻すべきだ。心意伝承の観点は、心に化学反応式を求め^{もと}るわけ

はない。過去から伝わってしまっているものを自らの心で実感すれば、それが心意伝承の実証なのである。自分たちの心の軌道を自覚すれば、未来にどう伸びてゆくかも見えてくるであろうし、それならばそのはたらきを生かしつつ軌道修正もできるしそうすればよいのだと思^{おも}う。

心意伝承を考えることは、過去の謎解きが目的なのではなく、あくまでもわが心が未来を構築する軌道をはかり知ることだと考える。

本章では、私たちの環境としての山水と、私たちが家庭生活そのものを山水遊泳の相^あで演出してきたことを見てきた。今回は、そのしめくくりとして、環境や実生活において、私たちが私たちの身体をどのように山水の遊働生命に適合させてきているのかを、問うてみたい。生きることは、この世と身体とがともに脈打つことであり、ともに心を通わせ合うことである。それについて抽象的な議論を行なうのではなく、古今の人々の具体的な実践をとらえたい。

浮島の図がなぜ「女体権現」なのか？

第六回の時に引用した雄略天皇紀の話。「山野^{やま}の體勢^{なり}

を連想させる図形であるとか、乳房の形に似ているとか、何か女性の肉体的特徴と類似している点があるかというところ、べつに女性の裸に詳しいわけではないが、類似性らしいところはないのではなからうか。

なんでこれが女体なんだろう。

確かに、ある種の感銘と呼んでよいような衝撃は受けた。が、予備知識なしに、自分がこの図に「女体」を見いだせるかと考えると、その自信はなかった。かつての日本人は、いったいどんな感性で、ここに「女体」を感じたのだらう。その感性は、もはや私たちには伝承されていないものなのだろうか。そもそもこれを「女体権現」と信仰する意識とはどのようなものであろうか。

地形名としては男体・女体、妹背山、といったふうには、雌雄関係をあらわすことも少なくないが、神名として「男体権現」と呼ばれるものは管見にまだ入らない。「男体権現」なる神格は日本人の心意に存在しないのだと仮定すれば、それもまたひとつの手がかりなのかもしれない。

「女体神社」なら、各地で見かけられる。あまり意識して調査したことがないので、地形特徴などについて確かなことは言えないが、必ずしも山間部ではなかったと思われる。女体を象徴する山や岩などもなかったように

思う。手がかりがつかめないままいつしか放置していたのだが、ある時偶然、ぎよつとするような「女体神社」に出会った。

山と水と月の曼荼羅

それは埼玉県越谷市柿木町、中川に沿ったところに鎮座する「女体神社」である。

参拝して、社殿内の奥にかかっている額のようなものが、四角ではなく妙な形をして妙なデザインが施されている感じがしたので、ズームしフラッシュ設定してシャッターを切った。鍵がかかっていたので中には入れず、電気もないので暗くてその時はどんな額なのかわからなかった。

あとで現像して、びっくりした。妙な形の額縁は、富士山をかたどったものだったのだ。

富士山が「女体山」として信仰されているのはほとんど常識だが、「女体神社」のご神体が富士山であるというのはここで初めて知った。どこの女体神社でもそうなのかはわからない。が、おそらくはその地域から遥拝できる「女体山」を御神体とするのだらう。

この額は「明治四一年（一九〇八年）八月十五日」、つ



奉納されていた額
女体神社（越谷市）

まり仲秋の名月の日を選んで奉納されたものらしい。ご丁寧に、富士山の「富」の字はまるで子宮のようにデザインされており、「土山」の文字は勃起した男根のようにかたどられている。額縁には白いトカゲのような長虫が描かれているが、これは精子なのだろう。顕微鏡技術は一八三〇年代に飛躍的に発展し、一八四一年に受精現象も発見されている。「叫び」などで有名なノルウェーの画家ムンク（一八六三〜一九四四）が、『マドンナ』という裸婦像の周囲に、回遊する精子と胎児らしきものを描きこんだのが一八九五年。近代科学によって明らかにされた生命の種子の姿が、芸術や信仰の現場に登場し始めているところである。

短絡的とは思うが、鎌倉期の「女体権現」図の松喰鳥も、単なる吉祥図として添えているばかりではなく、精液のような生命の種子を、中世人なりに、天駆けり群がるものとイメージし得ていたのかもしれない、そんなふうに妄想してしまった。

この女体神社の東側に流れる中川は、もう少し北に行つたところで庄内古川と古利根川と元荒川と合流する。というところは、今はさほど大きな川ではないが、徳川家康の四男松平忠吉によって、江戸湾にそそぎこむ大河水系、荒川水系とが集中する大氾濫地帯だったわけである。

柿木という地名についても、民俗学会にも所属している土木技術者の小川豊によると、植物の柿の木のことではないらしい。「周囲の地形・地質をよく見れば、カキは欠きに通じていて、柿は当て字。山が地すべり、崩壊地のクセ地である」「川を考える地名」一九八九年 山海堂」と述べている。

だからこの女体神社は、安全でのどかな水辺に鎮座していたわけではなく、いつ流失するかわからない危険な水域にしろうじて浮いていた、と言うほうが正確なのだろう。

田児の浦ゆうち出でてみれば真白にぞ不尽の高嶺に
雪は降りける (山部赤人 万葉集卷第三 三二八)

人口に膾炙したこの歌に代表されるように、富士山は、詩歌に読まれ、絵に描かれ、写真に撮られる際は、ほとんど水上に屹立する構図が選ばれる。そういえば、銭湯の男湯には、湯船に接した壁面にたいいてい富士山が描かれていた。女湯はどうなっていたのか、家内や母などに聞いても覚えていないと言う。富士山だったこともあるらしいが、それが一般的なものはわからないそうだ。電話帳で調べた銭湯屋に電話して聞いても、なぜだか、というか、不審者と思われたのだろう、「わからない」の一点張りで、女湯の壁画はいまだに判明しない。とにかくも、女体としての富士山の場合も、どうやら山と水辺という取り合わせが不可欠であるらしい。

では、越谷市の女体神社の額が、仲秋の名月の日を奉納日とする連関構造はどのように考えるべきか。

NHK大河ドラマ「花の乱」でこんなシーンがあった。申し子祈願で石清水八幡宮にこもった日野富子が、満月を見上げる。画面ではまるかに大きく輝く月に、富子の両手がそつとのびて、まるごと掬い取るように描かれる。そして、掌に湛えた光の粉を、富子は自分のおな

かにすり込むしぐさをする。こうして懐胎し、足利義尚を生むという展開となるのである。

月光を生命の種子と感ずる、心意伝承も加わって、おおよそ女体の神威をもよおす曼茶羅はそろったと言えようか。山と水と月と、である。

あえて女性そのもののリアルな肉体を描かないことに、案外意味があるのかもしれない。

漂流する女の水死体

西洋絵画の場合では、水に浮く女体が画題として好まれる。その代表的なものに、「オフィーリア」と「シャロットの女」とがある。

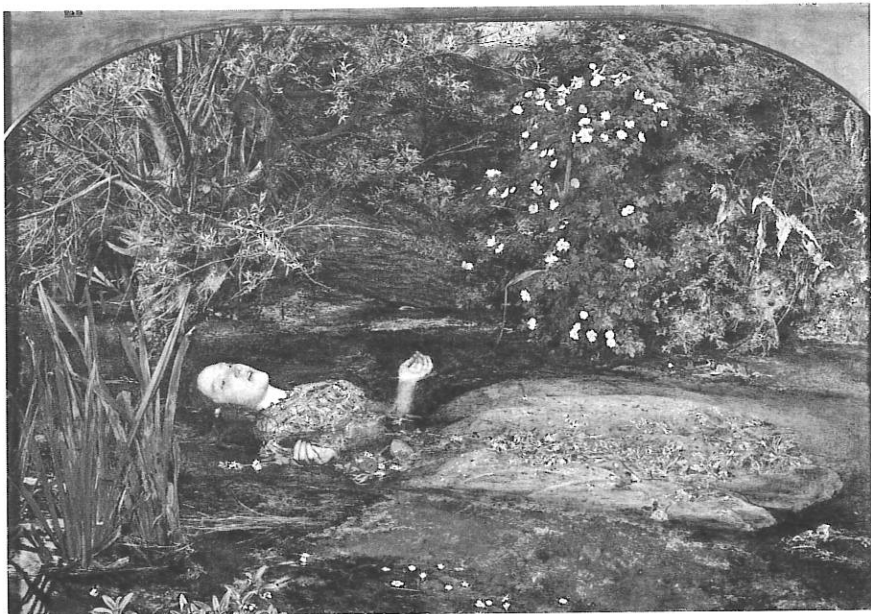
オフィーリアは、恋人のハムレットに父親を殺されてしまい、発狂して川に落ち、流され、そのまま溺死する。シェークスピア(二五四六〜一六一六)はとりたててそのシーンを見せずに、デンマーク王妃であるハムレットの母が、知り得た情報をオフィーリアの兄に語る形で処理した。しかし絵画や映画の中では、このオフィーリアの死をいかに美しく神々しく描くかに、芸術家たちは心血を注いでいるのである。

「シャロットの女」は「イレイン(エレイン)」という

題でも作品化される。アーサー王物語に由来する女性なのだが、描かれ方の趣向は異なる。

「イレイン」は一五世紀の騎士トマス・マロリー(一四一〇?〜七二)によってまとめられた『アーサー王の死(ちくま文庫)』に登場する地方豪族の姫。騎士ランスロットへの求愛を拒まれ、悲嘆のあまりに死ぬ。遺言によりその亡骸を船に乗せて流すというもの。『赤毛のアン』で、アンたちが遊びでこの船のシーンを再現している。アンがイレイン役だが、乗った船の底が破れており、途中で沈んでしまうところ、ギルバートという、アンとは犬猿の仲だが同時に微妙な想いも抱き合っている少年に、助けられるオチであった。

「シャロットの女」は一九世紀イギリスの桂冠詩人テニスン(一八〇九〜九二)の「シャロットの女(The Lady of Shalott 1832)」に拠っている(『対訳テニスン詩集』岩波文庫)。アーサー王のキャメロット城へと流れる川の、シャロットの中洲に、ひとりの機織り姫が館に閉じ込められている。彼女には何かの呪いが掛けられており、魔法の鏡が映す外界を織り続けなければならぬ。が、ある時凛々しい甲冑姿の騎士ランスロットが通りかかったとき、思わず窓辺に身を寄せて見惚れてしまった。とたんに織物が飛散し、鏡全体にひびが入った。



オフィーリア (ジョン・エヴァレット・ミレー) ロンドン、テート・ギャラリー蔵
©AKG/PPS通信社

身の破滅を悟った機織り姫は、小舟に身を横たえて、キヤメロット城へと流されてゆく間に息を引き取る。

「オフィーリア」も「シヤロットの女」も、漂流する処女の水死体という情景が、ドラローシュ（一七九七〜一八五六）の「若き殉教者」と同様の、聖画像としての靈威をもって人々の心を打つのである。

血まみれ泥まみれの女

私たちの「女体権現」は水死体ではない。だが、なぜだか田植えをめぐる伝承に関しては、若いヨメの死体がつきまといつてくる。

これについては柳田国男の『妹の力』におびただしく資料が列挙されている。豊穰なる生命力を発動する田の神を祭る田植の儀に際して、姑が若いヨメに無理な量の仕事を押しつけるといういじめモチーフをもって、ヨメが田んぼや沼などの泥水に水死体となって浮かぶイメージが伝承されるのである。

柳田は、神聖なる神田を「忌田（イミダ・ヨメダ）」と呼ぶことから、「ヨメ（嫁）」の身体と田んぼとの融合イメージを民意のスクリーンに合成したのだろうと言う。

られるのである。樋口可南子主演で映画にもなっている。

この芝居の人氣がことのほか高い。それはイコール、昔も今も、女性にウケているということでもある。凄惨な場面であるが、えも言われぬほどに官能的な場面と、感じ取られているからであろう。

問題は、日本版水死体女性の図が、どうしてこれほどまでに田植えと結びつくのだろうか、ということだ。オゲツヒメの「五穀起源神話」を持ち出すまでもなく、女体と豊穰な生殖力とをひとつに発想しているのは言うまでもない。だがどうしてこれほどまでに日本人は、殺戮と性的官能と水浸しとを一元化した演出にこだわるのか。

ウルトラセブンの“濡れ場”

「棚田に歓声泥んこバレー」という記事を見た（二〇〇七年六月二五日付読売新聞）。千葉県鴨川市平塚の大山千枚田において、六月二四日に大学対抗の泥んこバレー大会が開かれたという。田んぼをコートにして若い男女が入り乱れ、確かに泥まみれになりながらバレーボールをしている。が、競技としてのルールはかなりいい加減

それは確かにその通りかと思われるが、だからと言って、女の死体は単なる付会として、取り払って考えてもよいものとは思われない。

近松門左衛門の浄瑠璃「女殺油地獄」に「五月五日の一夜さを、女の家といふぞかし」とあるように、田植え前の一定の時間を、「女の家」と呼んだらしい。おもに岐阜、愛知、徳島、高知などに分布する行事で、田植えに奉仕する女性がショウブやヨモギで、自分の占有空間を示し、男をその圏外に排除し、精進潔斎して過ごすものである（『日本民俗大辞典』吉川弘文館）。

近松は、その「女の家」の晩に、美しい女が殺されるという話を書いたのである。

借金の返済に困窮した遊び人河内屋兵衛が、隣家の油屋である豊島屋女房お吉に借金を頼むが、無理を言つたため断られ、油を買うと言いなおして油断したお吉を脇差で刺す。腹を刺しては抉り、抜いては切りと、散々になぶる。お吉も油の樽をひっくり返し、撒き散らして何とか逃げようとする。二人とも全身油まみれ血まみれになってのたうちまわりくずほぐれつするが、ついに全身切り裂かれたお吉が血と油地獄の中で息絶える。

この凄惨な場面が芝居では延々二〇分以上かけて演じなもののらしい。それよりも必ずチームごとに仮装して、つまり俳優として神がかりして、泥濘を全身に塗りたくる祝祭空間を演出するほうが、むしろおもな目的のようだ。

六月二四日と言えば、大阪の住吉大社や伊勢の伊雑宮をはじめ、各地で御田植行事が行なわれる日だ。旧暦では五月二八日だが、新暦のいまは六月二四日が主流となっている。そういえば、伊雑宮の御神田祭も、実際の田植前の竹取神事に、地元磯部地区の屈強な漁師たちがふんどし一丁で田んぼに入り、わざわざ泥まみれになるように暴れまわり、互いに荒々しくじゃれあつたりする。バレーボールのような競技をするという名目はない。自分たちで勝手に飛んだり跳ねたり泥まみれになっているのを見て、単なる余興かと思つたが、こうなつてみると、バレーという言葉い訳なしに、ともかく泥まみれになることを行なうからこそ、むしろそのことに強い意義があつたのだろうと思われてくる。

その時は、こうして泥濘で暴れることが、田を耕すことになるとか、空気中の酸素を練りこむことになるとかなどの、何か科学的にも立証される効能を古人なりに感じ取つて行なっているのかも、などと考えていたのだが、泥んこバレーの記事を読むと「予想以上の激しい戦



棚田で泥まみれになってバレーボールを楽しむ学生ら（千葉県鴨川市）
読売新聞社提供



いざわのみや おみな
伊雑宮 御神田
（竹取神事前の、地元漁師たちによる“浪籍”）

いで田んぼが荒れたため、（学生たちによる田植えは）一週間後に延期された」とあったから、特別田んぼにとって効果的な行ないというわけでもないようだ。

難しくなってきた。いや、面白くなってきた。田植えという神事に際して、その泥濘ぬかまにまみれるというのが、伝承上は女性だったが、民間で行なわれるお祭りでは男女ともに泥まみれとなる。細かな違いにとらわれすぎてはならない。しかし単純な整理もできない。

血まみれも泥まみれも、田植えという神事と不可欠のごとく連コンシステント関リレーションされている。つまりこの、泥まみれになることと、血まみれになることさえ、じつは直結するのだろうか。などと考えること自体、相当やばい畏にはまりこんでゆくことになるだろうか。

唐突に、「ウルトラセブン」というテレビ番組が脳裏によみがえった。

幼稚園児の時に見たのだが、あれは性的と言っている興奮を覚えたものだった。湖などで戦うセブンの姿にある。

説明を要しないと思うが、M78星雲光の国からやってきた宇宙人ウルトラセブンは、ほかのウルトラマンなどのウルトラ兄弟と違って、全身が真っ赤なボディである。またほかのウルトラマンと違って、なぜだか湖など

で濡れて戦うことが多かった印象がある。回数統計はとっていないが。

湖などで怪獣に組み伏せられたウルトラセブンがずぶ濡れになると、真っ赤なボディがぬらぬらと光って、それこそ血まみれになりながらレイプされているような痛みと官能的な衝動を覚えたものである。私だけが変な子どもだったのだろうか。

ことに「ウルトラマンレオ」の第一話では、海で怪獣たちに「輪姦」されて、再起不能のダメージを受ける。ここまで来ると、製作者の側にもそうした狙いがあったとしか思えない。セブンに対しては、完全に「濡れ場」を設定しているのである。

ウルトラセブンも、性別は一応オスであろう。子どもたちのヒーローには違いがないのだ。にもかかわらず、時として女体としての官能性も発揮する。ここまでの事例とも合わせて、いったいどう考えたらよいのだろうか。

天の血の饗宴

泥との縁で、ここで先に「土つち」という日本語のイメージを考えてみたい。

高崎正秀は「ツチ」という和語は雷神の「イカツチ」、

火の神「カグツチ」の「ツチ」であると言う。つまり「ツチ」だけで一単語となるのではなく、何か別の語の接尾辞として「津つチ（川の血・霊）」を表すというのである（『古典と民俗学』上 五三頁 講談社学術文庫）。この観点にしたがうならば、通常私たちが土と呼んでいるものは、原イメージとしては何かの霊とか血の結晶体ということになるのである。いったい何の霊・血なのだろうか。

田植神事に先行して田んぼの泥濘ぬかるみにまみれる行事やイベントが各地にあった。近松の浄瑠璃では、田植え前の女の物忌み時間に、女が血まみれ油まみれになる。この演出が庶民には非常にウケる。

日本人の泥まみれと血まみれとは、やはりひとつに発想される心意が働いていると仮定してみよう。

泥濘ぬかるみは、土が水分を含んだものである。水分は、地下水による場合もあるが、基本的には雨によるものだ。つまり天水をはらんだ土が泥濘ぬかるみであり、何かの血である。雨の霊すなわち天の血が結晶したものが泥濘ぬかるみであり、生命を生み出す女体の局所そのものであったのではなかったか。

「天壤無窮の神勅」と呼ばれるものがある。日本書紀神代巻で、天照大神が天孫ニギノミコトに与える言

葉である。「天壤あめつちと窮きわまりな無なけむ」と訓ませている（岩波古典文学大系）。

家永三郎の説明によると、天孫による国土平定の神勅に、将来への祝寿を加えたもので、もともと和語で述べられていたのを、書紀の編者が漢文に書き改める際、唐の貞観四年の昭仁寺碑銘の「与天壤而無窮」といった、仏教の願文書を借用したものであるらしい（岩波古典文学大系『日本書紀』上巻 天壤無窮の神勅の補注による）。

外国語である「天壤」という語に置き換えたから、「あめつち」が「天と地」といった二元分割になってしまい、元のイメージがわからなくなってしまったのではないだろうか。

「あめつち」とはもともと天津血あめつちであり、豊穰なる生命力を有した湿地、泥濘、沃野をさしたのではなかったか。それらすべてが、天の、宇宙の霊血の結晶と考えられたのではなかったか。あながちただの空想とばかりも言えない。宇宙内のガスや塵が結晶して天体が成り立ち、大地となってゆくのだから。

アメツチ（天津血）という泥濘ぬかるみにまみれることは血まみれになることと同義。豊穰なる泥沼は山水未分の粘液。宇宙の精液と経血のブレンド。「天壤無窮」とは、むしろこうした混沌を宇宙論的に翻訳するために、あえ

て換骨奪胎した表現だったのかもしれない。天と地といった分割分類が不可能なほど、両者は窮極的な限界（区別すべき境界線）がなく、つまり窮きわみを無くしてひとつに融合しているものである。火砕流や土石流や泥濘ぬかるみに、天地の区分が崩壊した霊血がたぎり、生命たちの饗宴が始まる。そんな妄想に私はとりつかれてしまった。

若い嫁が泥田に浮いたり、「女殺油地獄」にあった殺戮という演出は、あくまでも手段でしかない。もちろん、死タナトスへの衝動理論を持ち出すまでもなく、生と死は生命存在の究極的なありようなので、ひとつに発想されやすいということもある。しかしあくまでも、天津血あめつちにまみれるエロスに煩悶はんもんすることが目的で、そのため的手段はどのようであつてもよい。

神々と交合し感応するエロスにまみれることが、遊働する世界に生きるという生命活動のもっとも根源的でパワフルなビタミンなのだ。だから今回、泥んこバレーの写真をたくさん見たO編集長まで「僕もやってみたくなつた」と、身もだえしつづ言ってしまうのである。

山水未分の女体権現は、西洋の聖画像のように、リアルな女性身体に限定はしない。水死体としての神聖女体でもあり、生命誕生時の、破水してどくどくあふれ出る羊水の海に浮かぶ母胎とも言える。だがもつと言えば、

泥んこバレーや伊雑宮御神田いざわのみやおかたや、ウルトラセブンに見られたように、女性であるという限定すらしない。

性の限定はしないが、女体なのだ。女性とか男性とかの区別なく、天津血あめつちにまみれるものはすべて、「女体」と化するのである。さらに言うと、「洲浜」と「水域」と区別せず、山水の未分化な混沌全体に、「女体」を覗てしまうのである。西洋絵画は、女性の人体が水に漂うという写実的な図柄であり、人間と自然とをはっきり区別する。西洋の分析的な宇宙と、私たちの未分化な混沌、そういう対比も可能であろう。

日本人の大多数が好むスポーツは、野球とサッカーである。個人的にはほかのスポーツを得意としていても、高校野球甲子園大会やプロ野球オールスター戦や日本シリーズ、あるいはサッカーのワールドカップなどにはほとんどの日本人が釘付けになる。

よくよく抽象してみれば、それらこそ泥まみれ汗まみれ、すなわち象徴的に血まみれの饗宴、祝祭空間を出現させるものであった。